

ぶら探訪

その拾七 尾道歩き「パート1」(防地口～長江口広場まで)

今回の「ぶら探訪尾道歩き パート1」は「防地口から長江口広場」まで歩きます。江戸後期の豪商「灰屋橋本家の庭園 爽籟軒」を見て、久保(亀山)八幡神社、巖島神社・八坂神社の狛犬・燈籠・鳥居など尾道石工の技がさえる石造物を見ながら路地歩きを楽しみながら、井戸や祠なども見て行きましょう。5～6年前よりずいぶん変わっていますが、まだまだ昭和の香りが残っている場所もあります。

古い町割り地図や市街地図で確認しながら歩き、昭和の尾道・古い家屋や家並から、その光景や風土感を受け止めながら楽しみましょう。

感性があれば単なる町歩きも楽しくなるかもしれません。

では「ブラブラ・ゆったり歩き」を楽しみましょう。



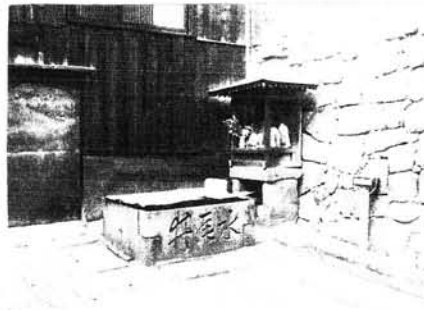
大きく立派な「玉乗り型」狛犬(右)。尾道石工の技と意気込みを示す



入口横に変わった形の燈籠がある。「かんざし燈籠」と呼ばれ、悲しい物語がある。



この狛犬が面白い。胴体は二つに割れて、足が短い。こんなに短い足の狛犬は初めてである。



水尾井と刻まれた井戸枠。旧尾道町内のいたるところに共同井戸がある。



今も昔の風情を残している丹花小路。常夜灯前を通り、石段を上がって行くと長江通りに繋がっていた。

平成 25 年(2013) 12 月 7 日(土)

備陽史探訪の会

岡田 宏一郎

探訪コース（見どころ）

- ① 尾道駅前からバスで「防地口」まで（140円）
- ② 爽籟軒庭園を見学（元灰屋橋本家別邸）・元図書館跡（門柱）
- ③ 久保（亀山）八幡神社の鳥居・鉾・狛犬など
- ④ 注連柱・軍配燈籠・句碑・記念碑など
- ⑤ 手水鉢と土台の狛犬・高御倉神社（石工神社）・狛犬などの石造物と尾道石工
- ⑥ 浄泉寺・雨水桶と天邪鬼・和七（濱仲背）の墓
- ⑦ 厳島神社・八坂神社のかんざし灯籠と玉乗り狛犬
- ⑧ 常称寺・ガード・正言の小路歩き・弁天神社・レンガ坂
- ⑨ 風呂小路と井戸・荒神社・石屋町を見る
- ⑩ 勤商場小路などの歩き・井隅神社・尾道造酢・鎮神小路と熊野神社・水尾井
- ⑪ 丹花小路と常夜燈・杓屋小路・磯の弁天
- ⑫ その他の小路歩き（橋本・三好屋・今蔵・小川小路など）
- ⑬ 終点の「長江口広場」で解散・・・最後にクイズに答えよう。





防地口のガード風景。右が昔ながらのガードで山陽鉄道時代のレンガで造られている。左は改修され広げられた大宮通りの道。以前の道は半分ほどの幅だった。道の右側下を防地川が流れている。



爽頼軒庭園前南方向の道。戦前は半分の道幅で、左半分にあった家屋は建物疎開で倒され道になった。防地川は右側の下を流れている。(昭和3年の地図で確認してください)



爽頼軒の塀は、以前高いセメント塀であった。その一部がここに残っている。



爽頼軒の説明板。豪商橋本家の別荘で庭園と茶室「明喜庵」が公開されている。



庭園の風景の一部。



茶室の風景。



庭園の角地。本通の入口の井戸と祠。



庭園の入口の門。通常は使われていない。



向かいの洋画専門の映画館「太陽館跡」。左のレンガ塀が当時の名残である。



明治期に造られた尾道図書館跡。30年代初めごろまでであった。石柱は当時の図書館のもの。



この道が「築島小路」突き当たりが、通称「明神さん」である。



久保(亀山)八幡神社参道入り口、左側の注連柱と燈籠。常夜燈には「明治廿七年八月」とある。



右側の注連柱。こちら側には「願主 石屋勘十郎」燈籠には「明治廿七年八月」とある。



左の燈籠の台座には「明治廿七年八月」「石工 寄井弥七」とある。



亀山八幡神社参道側の鳥居。笠木の反りぐあいが見事である。額も素晴らしい。柱(右)「萬治貳曆 霜月吉日」(1659年)「施主 大工石屋与七郎 小石屋助六 石屋中」とある。



二の燈籠に「天明八申年八月吉日」(1788)「施主住屋源七」とある。



参道の「隨身門と尾道石工の狛犬」 手前の石造物の柱は「鉾」であろう。この石造物は尾道の八幡神社(高須・吉和・久保亀山)だけにあると思っている。



右の「鉾」には「大正拾五年拾月吉日 建之」とある。下には「同 託造 岸信 徳明」とある。



これが「鉾」の形の石造物。「美郷村 現住當所 原善四郎 同フデ」と彫られている。



右の阿形の尾道石工の狛犬。台座に「辛文政四年巳五月吉日」とあり願主の和泉屋の名前がある。



卍形の狛犬。台座に「石工 祐四郎」の名前がある。



この台座の右に「石工 祐四郎」と名前が刻まれている



八幡神社の参道は、山陽鉄道建設と戦時中の建物疎開で切断されている。踏切を渡ると注連柱がある。



こちらの注連柱には「願主 寄井彌七」とある。彌七は尾道石工である。



こちら側には「大正四年十一月建之」とあり、尾道石工である「願主 百島長蔵」の名前が刻まれている。



「第十二代横綱 陣幕久五郎の手形」と第一回陣幕久五郎奉納わんぱく相撲記念碑」陣幕久五郎は相撲道の極意「受けながら風の押す手を 柳かな」の句を詠んでいる。



歌碑「は連れて行梅雨や鏡乃篝させ竹遊(?)」



「世を広く交る花のむしろかな」と読むのだろうか?)



下に見えるのが時宗「正念寺」で「延命井」が有名で、福山藩領から防地峠を下り西国街道を歩いてきた旅人はここでおいしい水でのどを潤したという。



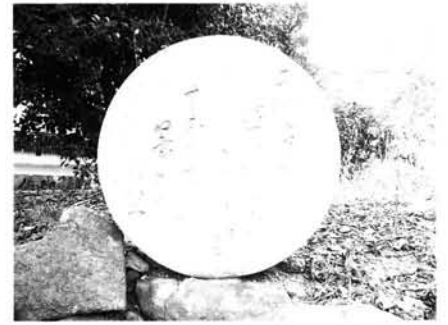
常夜燈と刻まれ「安政丁酉八月」(安政六年 1777)の銘がある。



反対側の常夜燈には「明治庚戌八月」(明治43年)とあり、左右の常夜燈の年代が異なっている。



「凱旋記念」の碑。「明治三十七八年役氏子出征軍人凱旋記念基金壹百圓奉納」とある。側面には「明治四十一年二月一日」と「発起人の名前が刻まれている。裏面には多くの出征軍人の名前が彫られている。



丸い太鼓型の碑には「かげ清く 照らすいき目のみず鏡 すゑのせまでも雲らざりけり」とある。裏側には「明治四拾四年亥三月壹日建之 渡邊市松」と彫られている。



「御供水」と刻まれている「井戸杵」か「水鉢の杵」であろうか。



二の鳥居と前の「軍配燈籠」と一番手前の左右の年代が違っていた常夜灯。



「神の徳 清きこころの 通ふ道 尾道楼主人」とある歌碑。これは舗石などを寄進した尾道楼の主人多田増太郎をしのんで村上花月が、昭和七年三月に建てたもの。



右側の「軍配燈籠」 尾道石工の技を示す「軍配の石垣」と「石組の妙」を観察してほしい。濱仲脊は北前船が来ると荷物を担いで陸揚げする労働者である。



西側の軍配燈籠。「東濱脊中」とあり「石工保兵衛」作で「天保五年」(1834)に奉納している。



隣に見える「浄泉寺」(真宗)の大きく張り出した軒。



二の鳥居も美しい。「正徳六年」の建立である。



柱には「正徳六丙申…」(1716)とあるが、六月に改元されているので「享保元年」にあたる。



こちらの柱には「藝備國主四品侍従源朝臣吉長」とある。



稻荷神社前の燈籠。竿には「枅屋久五良 おゆき」とある。これは陣幕久五郎の義父「初夕久五郎」が建てた物である。ただ火袋が壊され六角形の石が代わりに置かれ不釣り合いである。



和霊神社前の玉乗り狛犬。「肥前野母権現丸 幸太郎」とある。九州長崎の船主が奉獻したものなのか。



こちらの狛犬は「豫州…天神…」とある。どちらも尾道石工の作であろう。



和霊神社。ろう側に玉乗り狛犬がある。玉垣には「米屋・池田屋」などの商人の名前と神徳丸の船主名もある。



百度石。願主の「志満屋・福田屋」の商人の名前がある。また「嘉永七歳甲寅霜月」の刻銘がある。右奥の燈籠は「昭和九年一月吉日」と新しい。



百度石の裏側には、「取次 池田屋清助と石工 嘉十郎」の名前がある。



玉垣の柱には「天保四季癸巳正月吉辰」と彫られている。



手水鉢(水盤)に注目。四隅を狛犬が支えている。石工は新八である。手前の「幕石」は手洗いの水はねで裾を濡らすのを防ぐためのものである。



狛犬の表情がいい感じである。また「幕石」もいい。



かわいい狛犬と牡丹の彫り物にも注意してほしい。



手水鉢(水盤)には「天保七…輯丙申…九月」の銘がある。



願主は「山口玄洞」で「石工新八」の名前もある。



ここにも「山口玄洞建之」とある。



裏側には「水盤 天保七年九月 先代山口玄洞造ノ水屋 明治三十四年六月 現代山口玄洞建立之」とある。



歌碑の前にある「力石」 一番力持ちで有名だった「和七」の名前と「金助・甚次」の名前もある。



筑後國久留米 水天宮の祠。ここになぜあるのかは不明。



隣の浄泉寺の大屋根と巨大な瓦。大きさは「畳八畳分の大きさ」だといふ。



奉獻と刻まれている台座。「大正二年一月」とあり、上に何があったかは不明だが砲弾が乗っていたと推定している。台座の裏には「大正十三年五月再建」とあり、「石屋町」と住民の名前が刻まれている。



久保(亀山)八幡神社の狛犬。迫力ある姿と尾が魅力である。



石工祐四郎の優れた技を示す力強い狛犬。



台座を見ると「安政四年巳八月吉日 願主 和泉屋保兵衛 當所石工 祐四郎」とある。



八幡神社の本殿。元禄五年(1692)に再建される。



天照皇大神宮。側面には「慶應二丙寅正月 願主 志満屋吉兵衛」とある。



こちら側には「世話人 池田屋清助」「石工 助四郎」とある。



高御倉大神と刻まれた額束がある石工神社の鳥居。左の柱に「文政五壬午正月吉日」とある。



高御倉神社の神殿。左の燈籠には「文化十五寅五月吉日」とある。また「石工手間中」と刻まれている。



高御倉(石工)神社の由来が書かれている碑。この中に石工の先祖、即ち「石作大連公建真利根命を祀る神社」とあり「江戸時代の中期……福島村雲藤原徳栄という石工が尾道に移住した」と書かれている。



石工神社の燈籠には「石工手間中」と彫られている。



昭和六年栄修繕寄附碑。寄附者の中に「尾道を代表する豪商「橋本龍一」「山口玄洞」その中に石工の「山根源四郎」の名前がある。



大きな屋根と軒さが広がっている「浄泉寺 本堂」(浄土真宗) 冷房がない時代には「昼寝寺」として知られ、軒先が涼しいので昼寝をしている人がいた。



用水(天水桶)を支えている天邪鬼。その表情を観察するといい。



横に「天保十三壬寅二月吉日 施主 匠屋喜兵衛」とある。



こちらの天水桶には「施主 油久 佐世保市藤井悦造 兵庫縣藤井光三 昭和十四己卯十月 石工溝上民平 作」とある。



浄泉寺鐘撞堂。この梵鐘は昭和十七年に金属回収令により供出されたが、終戦後岡山の玉野の精錬所で発見され無傷で返還されたもの。珍しい例である。



浄泉寺鐘撞堂の由来。享保八年に建立。文政十三年に修復され、明治二十四年に山陽鉄道開通とともに現在地に移建された。梵鐘は文政十年に鑄造される。



浄土真宗「浄泉寺」の説明板。大永五年(1525)に木ノ庄町市原に建立したのが開基である。慶長元年(1596)に現在地に移る。本堂は元禄十五年、明治二十二年に焼失。明治四十四年に本堂が完成。



「大紺屋 大湊和七」の墓である。上が「カ石」で、下が「酒樽」になっている。



浄泉寺下のガード。レンガのところは山陽鉄道時代のもの。



この付近は家屋が建てこみ、戦後何度も火事にあっている。現在は再開発され当時の面影はない。



ここの小路はほんとに狭く人がやっと通れる狭さだった。大きく変わった道の風景である。



巖島神社・八坂神社と両方の名前が鳥居の額束にある。通称は「明神さん」と呼ばれている。



境内の右手にある「かんざし燈籠」の由来書。「芝居小屋の貧しいお茶子と浜問屋の若旦那との悲恋話。井戸に身投げしたお茶子が大銀杏の下に「かんざしを下さい」と哀しい声で訴える幽霊に人々がお金を出し合っ燈籠を奉納した」という話がある。



石工の技がさえる「かんざし燈籠」には「文政十年星次丁亥六月吉日」とある。基壇の世話人の名前は判読できない。願主十二名が彫られていて「竹本屋喜八 大黒屋善蔵 茶屋富五郎 播磨屋秋之助……」などの名前がある。



「石工善三良作」と彫られている。



巖島神社・八坂神社の社殿。



注連柱には「陣幕久五郎」の名前が刻まれている。反対側に石工銘があるが判読できなかった。



右の「阿形の大きな玉乗り狛犬」市内で最も大きい狛犬である。注目すべきは、どちらの狛犬にも生殖器があり、こちらはオスである。



台座には「天保八年」とあり、左の狛犬より16年後に製作されている。「願主 森岡屋茂萬」石工名は判読できない。



左の舛形の狛犬。「文政四年辛巳六月吉日 □□藤原□」とある。
これは誰が製作したのか？ 欠けている「藤原」だけでは不明だが「文政六年の大竹市の大歳神社」「文政八年の竹原市の住吉神社」「文政十年の竹原市の床浦明神」の狛犬は他と比べて大型で彫が深く、特に頭が大きい特徴から厳島神社の玉乗り狛犬と類似した特性が見られ、「石工棟梁 山根屋源四郎藤原傳篤」によるものと推定できる。



台座に「願主 富吉屋 兵助」とあり、商標がなかなかいい感じである。



注連柱の下に二人の石工銘があるがはっきりと読めない。



碑には「相撲道の極意を詠んだ句」と言われる「受けながら 風の押す手を 柳かな 陣幕」 嗣子室谷喜一が昭和二年に建てたという。



この神社の名は不明だが、台座に「廿三夜講中」とある。



「正一位 長官稲荷大明神」



ここには「福山町 大江楼 山村 石川」の名があり「東・中・西橋本、島居、西原」など尾道の豪商の名がある。



ここには大きな井戸が昭和30～40年代頃までにはあった。



神社の北西の小路を通り本通に出て、正言の小路に向かう。



浄泉寺前の「正言」と言われる小路。昭和二十年代までは下町の商店・市場の風景があり賑わっていた。



山陽鉄道時代からのレンガの狭いガード。



重文「常称寺観音堂」(室町時代)



常称寺本堂(県重文) 「歴応三年(1340)から貞治五年(1366)頃」のもの。



時宗「常称寺」の説明。「鎌倉時代後期の正応年間に時宗二祖真教上人によって創建されたと伝わる。現在の本堂は室町中期の建築で、外観を和様、内部構成を禅宗様としている。大門は室町前期の建築で常称寺の建築物で最も古い。



地藏仏の台座に「日本國六十六部 尾道住人蚊魚小路 近屋神原文六」とある。反対側には「元文五庚猿花二月(1740)」とある。



正言の小路から北に入ると火事で焼けた家と更地になっている空き地がある。数年前は古家屋に囲まれたの路地だった。



入って行くと右側に井戸と祠がある。火事があったので「火の用心」とカクレ、防火用水とある。



この道を入って行くと左に折れる。右の家は以前からあるが、左は新しくなっている。



以前と違い新しい家が変わっている。小路の右向こうに「辨天神社」がある



左の鳥居の柱には「天保五申□正月吉日」とある。



右の柱には「奉寄進 大西屋、大黒屋」などの名前が刻まれている。



「石屋吉助」ともう一人の名前がある。(読めなかった)



辨天神社(厳島神社)を見る。



「天保三壬辰九月吉日」(1832)と刻まれている御神灯(燈籠)



神社から見た焼けた家屋。古い家屋があったのに、すっかり風景が変わっている。



内部が焼けのこっている家屋。中の様子が見えた。



右の建物は戦前からの家屋である。道を進むと「レンガ坂」に出る。レンガ坂は「デン木坂」と言われ、デンギ(杖)を突かなければ歩けない坂だったという。



レンガが敷き詰められた「レンガ坂」この坂道を行くと「大山寺や御袖天満宮」に行ける。



下り方向を見る。このレンガ坂は戦前からのお屋敷町で、風情がある家屋の風景である。



下ると浄泉寺が見える。大きな畳と独特の形をした庫裏に注目しよう。



西國寺の坂を下って行くと、右手に今も使われている井戸があり、地藏仏も祀られていた。



本通に出て進むと「もとゆい小路」跡がある。(のちマコトヤ小路とよばれる)以前は住宅がひしめき合っていた路地だった。狭い道で



北側の「風呂の小路」向こうに正言小路へのガードが見える。



風呂の小路が国道に出る角の家がなくなり更地になっていてびっくりした。ここに「荒神社と境外社の稲荷社」があり、井戸が見える。



井戸枠には「亀齢水」と刻まれている。



こちら側の井戸枠には「癸 嘉永六年 丑 七月吉日」(1853)とある。



小さな祠に祀られている石仏。近所の人々が今も大切に祀っている。



荒神社を後ろから見る。燈籠には「大正十一年八月建之」とある。また「大阪市南区難波…安田常次郎」の名前がある。



南の国道側から見た、正言小路に入って行くガード。山陽鉄道時代の歴史がレンガと花崗岩から感じることができる。



常称寺大門西側の「尼寺小路」。今はこの向こうには行けなくなっている。



勤商場小路。明治期には賑わっていたところであるが、すっかり変わっているが、右の山根産婦人科医院の建物は戦前からそのままの姿で残っている。



勤商場小路の下は石段になっており、船着場跡で雁木であったと云われている。降りて右に折れ石屋町に出る。



この通りが石屋町で、昭和二十年代には数軒の石屋が営業していた。今は全くその面影がなくなっている。



新開の飲み屋街の中にある「井隅神社」このあたりは元遊郭であったところ。井隅神社の旧称は「石の八幡」と言っていた。祭神は「恵美須大神」である。



燈籠には「文化十四丁丑九月」とある。

井隅神社の祠の前に「水神」さんが祀られている。横の常夜灯には「井隅町」と彫られている。



氏子中とある玉垣には「明治十四年五月吉日」となっている。



井隅神社は遊郭の中にあるので、世話人として「都楼、東京楼」などの名前がある。反対側の柱には「昭和二年五月建之」とある。



神社のすぐ向こうに「二井戸」と刻まれた井戸がある。たしかに二つ井戸が並んでいて、祠もある。



この通りが「仲之町」ですべて遊郭があったところである。



ここが「千日前」と言っていた映画館が三館あったところで、左の所に「玉栄館」という映画館があった。



水尾小路、南下の井戸。今は使われていなく蓋を開けてみると草が生えていた。



井戸の南方向を見る。正面の建物のところが「第六十六国立銀行」があった場所である。その右の建物が「旧尾道銀行」である。



まだ以前からの建物が残っている。比較的以前からの光景が感じられるところの路地である。



昔ながらの面影が残っている小路。ここを通過して本通りに出る。



小路の中ほどに井戸と祠がある。戦前からの風景がまだ感じられる。



本通に出ると商店があったところが更地になっていたのが驚いた。見えていなかった井戸があった。左向こうに「熊野神社」が見える。



これが井戸跡で商店の庭の中にあり、使われていたと思われる。



更地になった商店・住宅の跡は縄が張られていたので、間もなく建築工事が始まるかもしれない。



この小路が「鎮神小路」で奥に熊野神社がある。



中国新聞に載っていた記事が紹介されている。(水尾井戸について)



小路を歩いて行くと、以前山陽道歩きの時あった建物がなくなり、更地になっている。路地裏の風景が明るくなっていた。



熊野神社(旧称熊野権現) 由緒は「社殿によると、往古境内に二本(夫婦松)の松があったが、正徳元年(1711)この松で御神体を造って祀ったという。その跡に井戸を掘り御供水としたと伝えられる」と書かれていた。



熊野神社の鳥居には「氏子中 石工棟梁 山根屋源四郎藤原傳篤」とある。向こうの道が入ってきた「鎮神小路」の路地である



反対側の鳥居の柱には「□文政六癸未五月□日」とある。



面白い形の「行啓紀念」と刻まれた碑があった。碑には「神社修繕寄附者」の七名の名前が刻まれている。



碑の裏側には「大正十五年七月」とあり、當番五人の名前がある。



熊野神社の社殿を見る。左の狛犬に注目してほしい。



尾と胴体が割れている狛犬。小さくてかわいい狛犬だが、足の短さに注目してほしい。



正面から見る。狛犬の表情と短い脚。このような狛犬は珍しいと思う。



風化していて判読できなかった鳥居の刻銘。



神社の上から見た井戸。次に訪れた時には建物が建てられ、見えなくなっているかもしれない。



神社横の「水尾井」。井戸枠の内側に明治期の年代がある。



「水尾井」の井戸は今も大切にされている。



その奥にも井戸がある。これも使われているようである。



明るくなった路地奥の井戸と熊野神社の風景を見る。



出口は西側の路地である「築地小路」を通る。家の中に入って行くようで通っていいのかな？との気がする路地である。



ここが建物の下を通る路地である。



築地小路を出口から見たところ。知らない人は入っていいのが戸惑う光景である。



ここが水尾町で「水尾小路」である。水が尾のように流れ出ていたことから来ている。ここを下って行くと市役所に至る。



尾道造酢の店と工場。尾道の酢製造業者は大正初年に9軒あったが、県内の約30%を占めていた。尾道造酢は大正七年に6軒の酢製造業者が合併してできた。創業は天正十年と言われ、東灰屋の橋本次郎右衛門によって始められた。



店に展示されている酢の製品。「そのまんま酢」が現在の代表的な商品である。



北陸、北海道まで移出されていた「カワホシの尾道酢」の酢瓶。



秋元洋服店の時代を感じさせる建物。屋根や柱、アーケードに隠れているが窓もレトロである。



秋元洋服店横の小路風景。このあたりは橋本町と呼ばれ「橋本小路」である。



この小路から「丹花小路」に入っていく。左向こうに空き地があるが、明治期のものと思われる古い蔵があった。



左に折れると石仏がある。路地ではこうした地蔵仏をよく見かける。



「丹花小路」の風景。常夜灯がこの路地の象徴である。長江からこの小路を抜けて新開への道としてよく通行されていた。



西側の路地は住宅の下をくぐる。左に折れるが行き止まりである。



行き止まりの風景。込み入った住宅地の光景である。



もう使われていないと思われる井戸。



常夜燈には「金毘羅大権現」と刻まれているので、江戸期のもつと分かる。



反対側には「町内安全」「文政六年癸未九月吉日」とある。



横にある井戸。「大正四年十一月設」とあり、商標か屋号の印がある。この井戸は今も使われているようだ。



井戸の上の道を上ると懐かしい昭和の
雰囲気を感じられる風景がある。



常夜燈前の石段を上る。この向こう
は建物疎開と削られてできた国道と
鉄道で道は切断された。



石段下は国道で、昭和二十年ごろは線
路を渡る道があった。今は通れない。



上から常夜燈と丹花小路を見て戻
って行く。



小路を見ながら本通に出る。



このように建物がなくなり駐車場に
なっている。



まだ残っている蔵の建物。本通りの裏
側にはこのような建物が残り、見るこ
とができる。



「三好小路」に入っていくと「高尾稲荷大明
神」がある。ここは三好屋という呉服屋が
あったことから呼ばれている。この小路
もすっかり以前とは変わってしまった。



この小路もすっかり変わってしまった。
突き当りの家は昔のままの雰囲気が
残っている。



建物がなくなり様子が一変している。
蔵だけが残っている。



井戸だけは残されている。路地には井
戸が多くあることが分かる。



荒神さんである。



荒神さんから狭い路地を抜けると地
元のスーパーつるや横に出る。



この小路が「杓屋小路」で古くは「叶小路」と言っ
ていた。(叶町である)
ここにはひ杓を作る職人が多く、また「田面船」
を作っていた店もあったが、今はなくなった。



磯の弁天。真之郡尾道略図に長江の河口
に「べんてん」とある。このあたりに「市」
が立っていたことから「市神」として祀ら
れていたことも考えられる。
注連柱には奉獻者の「津田新兵衛・播磨
屋伊右衛門」の名がある。



注連柱には「嘉永二季歳己酉七月吉日」とある。



玉垣には船名と船主の名前が彫られている。(大黒丸 次助・長樂丸 大吉・明神丸・久兵衛など……)



こちらの玉垣にも同じように、船名と船主名が刻まれている。



これには「矢野屋、金光屋などの商人の屋号と名前がある。



磯の弁天からガード向うの昔の長江通りが見える。



北から杓屋小路の南方向を見る。



南側から見た杓屋小路の風景。



向かい<南方に>にある「小川小路」



小川小路で見た「勝手口の風景」昭和の風景が残る勝手口と路地の光景を見た。



本通り側から見た「今蔵小路」の風景。



下って行くとまた更地があった。向うが「今蔵小路」で建物に昭和の香りをを感じる趣がある。



米場町にある建物風景。左が「向井酒店」で、戦前から変わっていない。右は「旧住友銀行」の建物であった。



下ったところにレンガ造りの建物がまだ残っていた。ここには「のこぎり販売とのこぎりの目立」をする店があった。右に折れると「薬師堂通り」に出る。ここを北に進み、ラーメン屋を見ながら「長江口広場」に向い、解散となる。



中ほどに「大國水」と彫られた井戸がある。ここは今も使われており、ポンプを押すと水が出る。



今蔵小路と小川小路にわたって本陣があり、その本陣跡の土台石である。



この道が「胡小路」(跡)で今は広げられている。(地図参照) 以前は車があるところに消防署があった。

明和二年(1765)に祀られ、正式名は「荒神宮胡神社」と言われていた。山陽鉄道が開通すると荒廃したので、有志によって長江中学校北側の「和加礼地区」に移設され復興した。



左の時計横の道路が「ヌリヤ小路」跡である。(地図を参照してください)



向こうのバス駐車場からここまでの広場が「文政四年の尾道町絵図」に書かれている豪商の「灰屋吉兵衛」(橋本家)の屋敷跡である。(地図参照)



この通りが「薬師堂通り」であるが、戦時中の建物疎開で家屋が倒され道が広げられた。

ここでクイズです。「さて道のどちら側か、または両側が広げられたのでしょうか？」

①左側(東側) ②左側と右側の両方 ③右側(西側)「どれでしょうか？」



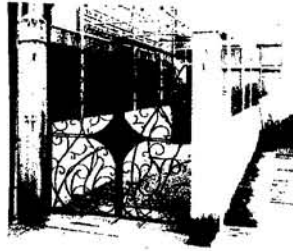
この鉄骨電柱は「昭和初期」のものであることが絵葉書から分かった。ここにだけ一基のこっついて今も使われている。

この鉄塔電柱は今も一本だけ残っている。



昭和6～10年頃の尾道本通りの風景(水尾町付近)

(出典 尾道学研究会蔵 絵葉書より)



最初の図書館跡。大正4年に市立図書館がこの場所に開館した。門柱は当時のものである。

市立図書館跡の門柱

ここに市立図書館があり、その名残の門柱である。『尾道案内』には「明治三十九年八月四日 日露戦勝記念として創立せられ、私立尾道図書館と稱し、久保町尾道勸商場楼樓上に於て開館し居たるも、大正三年市の経榮に移り、現在地に建築開館せり」と書かれている。

当時の図書館は木造のがっしりとした建物で二階が閲覧室だった。学生が多く利用していて、夜は9時まで開いていた。9時になると電灯が点滅し、それが閉館の合図であった。

昭和36年2月に久保八幡神社の裏山にモルタル造りの新館がオープンする。だが設備も充実せず狭いので旧市民病院跡(以前は厚生病院と云っていた)に石材を使用した豪華な図書館が開館した。平成2年11月8日のことである。

久保亀山八幡神社の一の鳥居

本通りから北に入った参道に高さ6m余りの大きな鳥居がある。これには「萬治貳曆霜月吉日 施主當町中 大工石屋与七郎 小工石屋助六 石屋中」と刻まれている。

鳥居の笠の反り大きさと立派な額の見事さも見落とせない、と思っている。

陣幕久五郎の燈籠

稻荷神社前に十二代横綱陣幕の義父初汐久五郎の建てた燈籠がある。弘化四年陣幕が初汐久五郎に入門し、この後、嘉永五年(1852)初汐が柱に「榊屋久五郎 おゆき」と刻み寄進したもの。だが酔っ払いが倒し火袋が壊れ六角の石が置かれている。

二の鳥居

高さ4m余りの鳥居は広島藩主浅野吉長が「正徳六年」(1716)に寄進とあるが、もとは常称寺あった「祇園八坂神社」に寄進されていたものである。それが神仏分離によって明治二年、八坂神社が巖島神社に移される時に、何かの手違いで亀山八幡神社に持っていかれたと言われている。

軍配燈籠と石組

見事な石組の燈籠で、尾道石工の優れた技が披露されている。

「石工保兵衛作」の軍配燈籠は「天保五年(1834)の奉納で「東濱仲背中」が奉納したものである。また仲背たちが力を競った「力石」が住吉神社など各所の神社などに残っている。力石の重いものは二百二十キロもあり、持ち上げた浜仲背の名前が刻まれている。

一番力自慢の浜仲背は「大紺屋和七」で墓が常泉寺墓地にあり、頭石が力石で、次の台石が酒樽、その下が角の台石となっている。裏に明治二年とある。

台座の石組の美しさや、丁寧に積み上げられたところも見逃さずに見て下さい。

(なお和七にちなんだ「和七最中」が和菓子屋の中屋本舗で売られている)

「句碑・歌碑」について

左の一段高くなったところの庭園跡に太鼓型の碑がある。これには「かげ清く照すいき目のみず鏡すゑの世までも曇らざりけり」とある。新地にあった映画館の「玉栄館」（今はない）前で置屋行をやっていた渡辺市松が「明治四十四年三月」に建てたものである。

後ろには舗石などを寄進した尾道樓の多田増太郎をしのいで村上花月が昭和七年三月に長方形の花崗岩「神の徳清きところ通ふ道」と彫っている。

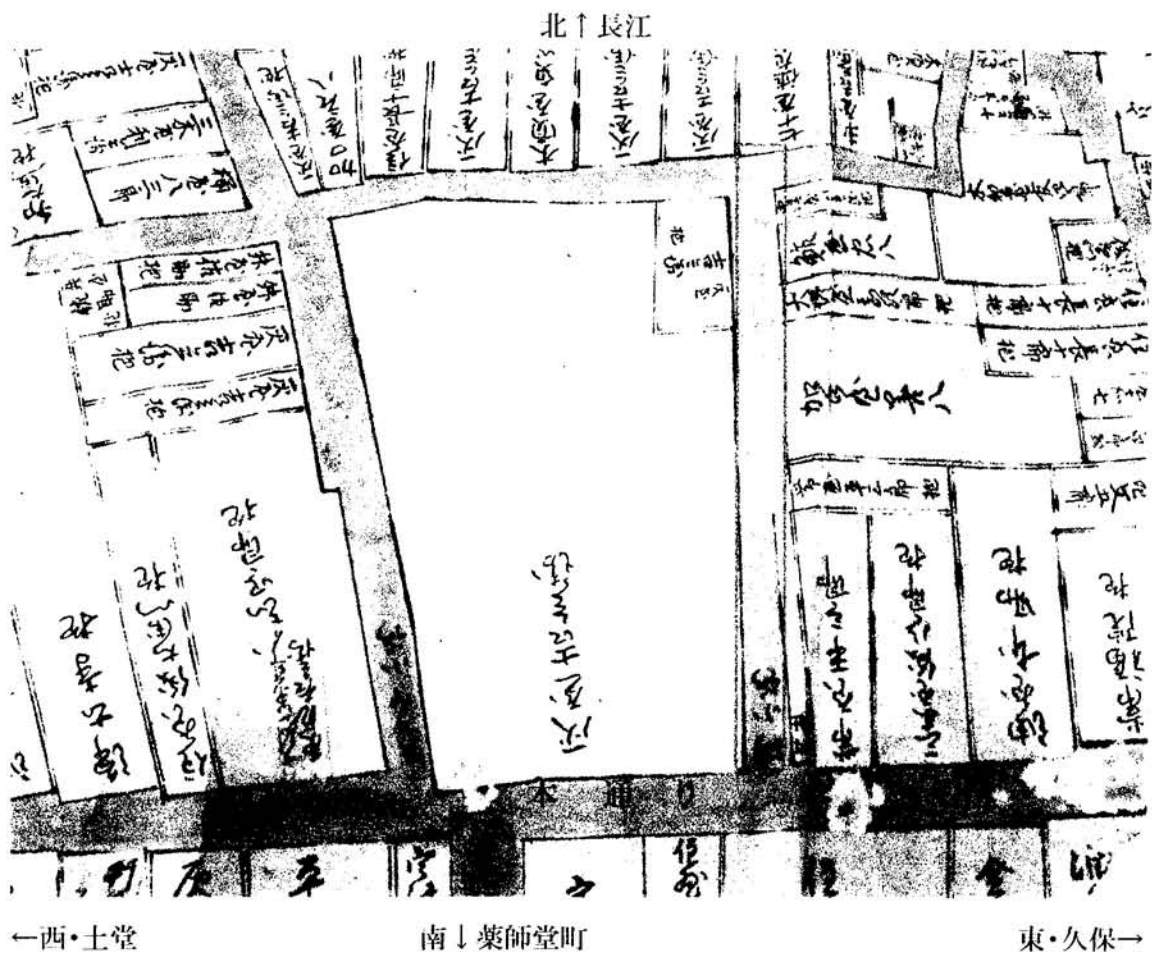
このそばに加藤対山の句「世を広く交わる花のむしろかな」と彫られた碑がある。

本殿東側の石工の神社前に「飲み居へて瓢た無 人に愛せられ」の句碑がある
碑は「明治三十四年」の建碑である。下のところに瓢箪が彫られている。

また涼月園竹遊の「は連て行梅雨や鏡乃簪さき」（大正十三年三月）の句碑もある。

胡小路(拡大図) 「尾道学研究会 第20回例会資料から」

胡(エビス)小路



尾道町絵図 ぶんせい 文政4年(1821)より 長江口界限 (尾道市立中央図書館蔵)

久保亀山八幡神社の手水鉢を支えている狛犬

四匹の狛犬が手水鉢を支えている彫り物はここだけでではないのだろうか？

このユニークな「水盤」の石造物を造ったのは石工の「新八」である。

新八の作品は文政十三年（1830）から嘉永七年（1854）までの間に15点の石造物が確認されているという。常泉寺の天邪鬼が支えている天水鉢は「天保十三寅9月 石工 新八作」とある。手水鉢前面のボタンと思われる浮き彫りは見事であるし、龍の口から水が滴る下は水の波紋が素晴らしいと思っている。

また水で手や口を清め、その水を流すときはね返って足元や裾を濡らさないための「幕石」がある。よく考えた造りであり、新八のこだわりであろう。

この手水鉢の施主は先代の山口玄洞で、上屋は二代目山口玄洞である。

山口玄洞は大正十二年、尾道の上水道工事に対して工事費用として103万円5千円を個人で寄付して工事費用の7割近くのを負担するなど多額の寄付をしていて、当時の尾道市の財政を援助していることから尾道上水道の恩人として久山田水源地に記念の石碑が建てられ尾道市名誉市民になっています。

久保亀森八幡神社の狛犬

本殿前の左右に鎮座している迫力と気力にあふれ、お尻を高く上げた「かまえ型」とも言われる狛犬はどうですか？ 尾道型と言われる「玉乗り狛犬」ではないが、尾道石工の技量を示すものであり「尻尾」や体の文様も素晴らしいと感じているのである。

これは「安政四年」（1857）に彫られた「石工祐四郎」の力作である。

願主は「和泉屋保兵衛」とあり石屋町一帯の大地主で、和泉屋保兵衛抱えと文政四年の尾道絵図に記入されている。

高見倉神社（石工の神様を祀る）

石工の神様を祀っている「高見倉神社」が尾道久保の亀山八幡神社境内にある。

享保十六年（1731）創建、安政四年（1857）建立とある。これについて「享保の頃、大坂石工福嶋村藤原徳栄という石工が尾道に移住して来て石工連中に石工の先祖である『石作大連公建眞利根命』を祀る神社を建立するように発議し、享保十六年（1731）二月吉日を選んで亀山八幡宮境内に『石工の神』を建立した」と記されている。

この摂津の国から移住して来た『藤原徳栄』という石工が地元の石工連中を東ね神社を作らせたということから指導力を持っていたと考え、そうしたことから石工の「山根屋源四郎藤原傳篤」と「藤原の姓を名乗り棟梁」と彫られていることから「藤原」とは棟梁としての卓越した技能と地位にあったことを示しているとは自分は考えている。

八坂神社

巖島神社に合祀されている八坂神社は、もと常称寺境内にあった。正応四年(1291)に疫病が流行したので、輓の祇園神社の神霊を受けて神輿一体を作り、旧6月7日から14日まで祈願祭礼をしたのが祇園さん(祭り)の始まりである。

その後明暦四年(1658)に三体神輿を作る。祇園祭が盛んとなったのは、宝暦年中からであり、神輿は久保、十四日、土堂の三町にちなんでいる。

夏祭りとして祇園祭は、夏の夜の夕涼みをかねて近隣各地から多くの人々が集まり参詣した。現在は住吉祭りの花火に人出が多く、昔の賑やかさはない。

巖島神社・八坂神社と狛犬

巖島神社・八坂神社の境内に尾道最大の「玉乗り型狛犬」が鎮座している。

地元では巖島神社を「明神さん」と云っており、もと南の海岸につきだした場所にあった。文政四年の「尾道町割地図」を見ると「巖島社」と書かれている。

八坂神社は明治の神仏分離令によって、時宗の「常称寺」にあった祇園社(八坂神社)がここに移され、合祀された。夏祭りの「祇園祭」は勇壮な「三体回し」が祭りの花形で三体の神輿が広場の柱を中心に旋回するけんか祭りでもある。

この新地一帯は宝暦年間に豪商の灰屋橋本家によって南の海岸一帯が埋め立てられ造られた土地で歓楽街となった。(地図を参照)

かんざし燈籠

境内には稲荷、猿田彦の小さな祠もあるが、入口にそびえる樹齢五百年と言われる銀杏の木がそびえ、そばには井戸と「かんざし燈籠」がある。

この特異な形の「かんざし燈籠」は高さ4.2mあり「文政十年(1827)」の建立で世話人の名前は判読でき、12名の屋号・名前が刻まれている。一部を紹介すると「竹本屋喜八・大黒屋善蔵・茶屋富五郎・播磨屋秋之助・茶屋儀八・府中屋利兵衛……」などの銘がある。

このかんざし燈籠には「お茶子と若者の悲しい恋の物語」が伝わっている。(説明板にも話が書いてあるが) 昭和39年に亡くなった「杉山エイさん」が尾道民話研究会員に語られた話も紹介します。

「昔このあたりは非常に淋しいところでした。雨のしとしと降る薄気味悪い夜の事。急ぎ足で明神さんの前を通りかかった商人が、ふと見ますと銀杏の木の下に傘を差した十六〜七才の娘さんがうらめしげにじつとこちらを見ております。しかしその娘のうらめしげな泣き声の気味の悪い事、商人は一瞬身の凍るような恐ろしさにおののき、後も見ず駆け出しました。それから雨の降る夜となるとその娘を見たと言うもの、いやうらみ言を云う声を聞いたと云う者が次々にあられました。人々はこの銀杏の木の精が出るのだろうか、それとも近くの色街の娼婦が恨みを胸に秘めたまま死んで往生できなくてその霊が出るのだろうか?と噂しあいました。そんなある日、お茶屋の主人が「銀杏の精であれ、娼婦の恨みであれどちらにしても娘さんの事、噂にきけば銀杏の木の前に出る娘さんは、かんざしをさしてないそうな、それでひとつ供養のためにかんざし燈籠を造っては……」と云いました。町内の人々は、この粋な提案に賛成して文政十年六月、明神さんの銀杏の木の前に大きなかんざし形の燈籠を立てましたそれからというものは、その娘さんを見たという人はいませんでした。」(「郷土の石ぶみ」より 山陽日日新聞社)

また境内には第十二代横綱陣幕久五郎の「受けながら風の押す手を柳かな」と相撲道の極意を表した句がある。これは陣幕の嗣子室谷喜一が昭和二年に建てたものである。

注連柱（神社庁は標柱と書いている）

この標柱に彫られている語句を「宣揚文」といい、標柱を立て宣揚文を刻む目的は様々であるが「国家繁栄祈願、国家的事件の記念、凱旋記念、戦争終結の記念、皇室行事の記念、神徳称揚、神恩感謝、五穀豊穰、神社改築記念、境内整備記念、玉垣奉献記念」など目的は様々で、古稀記念など個人的記念なども見られる。

また時代の風潮を強く反映したものや農村地域では「五穀豊穰」などの祈願・感謝などが刻まれたものもある。多いのは国家や皇室、戦争に関係したものをよく見かける。

この宣揚文には変体仮名あったり草書体であったりするため解読が困難である。読解には漢文(中国古典)、日本の古典、歴史、宗教に関する知識も要求される。

巖島八幡神社の標柱の宣揚文

「靈徳徧覆載（霊徳徧く覆載し）」

「萬物因此榮（万物此れに因りて榮ゆ）」

久保(亀山)八幡神社の標柱の宣揚文

「宣揚大道流通鴻化（大道を宣揚して鴻化を流通し）」

「神祇所護社稷欣祐（神祇の護る所にして社稷祐を欣ぶ）」

鴻化(こうか)「大きな徳化。 天子の善政。」

宣揚(せんよう)「盛んなさまを世にはっきりと示し表す。」

神祇(じんぎ)「天の神と地の神。」

大道(だいどう)「人の行うべき大事な道。 天地の道理としての道。正しい筋道・方法。」

社稷(しゃしょく)「中国の建国のとき、天子・諸侯が壇を設けて祭った土地の神(社)と五穀の神(稷)。国家。」

靈徳(れいとく)「尊く優れた徳。霊妙な徳。」

覆載(ふうさい)「天は万物をおおい、地は万物をのせる」

徧(へん)「あまねく広く行きわたる。」

祐(ゆう)「たすける。」

欣(きん)「よろこぶ。」

明神の狛犬

拝殿前の玉乗り型狛犬を見て欲しい。高さ 1.5m全長、1.3mあり台座と連なった一枚岩に彫り上げられている。この大きさと見事な彫りが尾道石工の技を示している。また奉納した商人の経済力も見落としてはならない。

さて狛犬だが、これは尾道最大の玉乗り型狛犬で、左の呷型と右の阿型の狛犬の製作年代は違っている。本殿に向かって左の玉乗り型狛犬には「文政四年（1821）辛巳六月吉日□□藤原□」とあるが判読できない。だが、これは「石工棟梁山根屋源四郎」による製作と思われる。（狛犬の重さは約6トンという）

願主は「富吉屋兵助」となっているが、商標が現代的で注目して確認してほしい。

また右側の阿形の狛犬は 16 年後の「天保八年」に製作され、「當所在石工棟梁太助定光作」となっている。願主は「森岡屋茂萬」である。

この見事な玉乗り型狛犬は大いに気に入ってる。みなさんはどうですか？

尾道の小路・町名

戦災による被害を受けなかった尾道は、戦前からの古い雰囲気を感じられる小路や町名が今も多く残っている。小路の入口に、名前を刻んだ石碑があるので気をつけて見て欲しい。

＜風呂ノ小路＞ 鉄道のガードまで続いているが、途中国道によって切られ、道がなくなっている。

＜勧商場＞ この道一带に商店が並び、芝居小屋も在ったと言う。明治の初め、商家の子どもを商人に養成する塾があったという。突き当たりは階段になっていてこの下は海であった。

＜石屋町＞ 昭和 20 年代までは両側に石屋がずらりと並んでいたが、今では一軒も無い。だが尾道石工の優れた技を示す石造物が各地の神社などに今も残っている。また北前船によって北陸・佐渡島などにも運ばれている。

＜水尾町＞ 熊野神社あたりの井戸から水が尾を引いたように流れていたので「水の水尾小路」と名づけられたという。現在では昔懐かしい水まつりが復活し、6月の祭りとして賑わっている。

＜神鎮小路＞ こんな小路の奥に神社がある。熊野神社という。その西側に井戸があつて「水尾井」と刻まれ、今も大切に使われている。

（中国新聞の記事を読んで下さい）井戸枠の内側に明治の年号がある。

＜丹花(たんが)小路＞ 古い尾道の小路の情緒を残しているところである。石段を上がると町内安全の常夜灯がある。また井戸があり、整えられた井戸わくからも大切にされていたことがわかる。尾道の街歩きは小路と共同井戸を見るのが楽しい。そこには今も息づいている生活と大切に使われている井戸から生活史がわかる。（中国新聞の記事を見て欲しい）

＜今蔵(倉)小路＞ <三好小路＞ 大商人の邸宅跡からついた小路名である。

＜小川小路＞ 豪商小川氏(笠岡屋)の邸宅があった場所から名がついている。

＜杓屋小路＞ (叶小路ともいう) ベニヤ文具店から諫見医院までの道をいう。木製の杓を作る店があったからで、以前は「田面舟」を作る店があった。

この道から国道を越えて長江通りに入って行く道が昔の道である。



常称寺の門 かなり痛んでいる。屋根に巴紋があるが、それぞれ久保、十四日、土堂の町名をあらわしている。



水尾町通り角にあるカクホシ尾道酢の会社。尾道は米酢でも有名で、北前船で各地に運ばれた。酢屋は長江口に数軒あったが、今はなくなっている。

尾道酢

水尾町の角に「カクホシ尾道酢」の会社がある。尾道酢は米酢で昭和20年代には長江口に酢醸造の店が集まっていた。

尾道酢は江戸中期にかなりの店があったという。造酢の原料には秋田米が使われている。これは「秋田米は品質はよろしいが、小粒なのと砂が混ざっているの、食料としての商品価値が低い。しかし安価なので、そこに目をつけた商人が逆に力をいれたものらしい。」

明治23年の統計によると、販売石数が一万石・三万二千元とあり、九州、備前、備中、阿波、石見、大阪などに送られた。

中

國

新

聞

2007年(平成19年)1月4日(木曜日)

「昔はそうめんを冷やしていたのよ。大事な水です」と教えてくれた。住民は交代で月一回、井戸の周りを掃除する。二、三年に一度はポンプで水をくみ出し、内部の汚れを取り除く。今川さんは「飲めんよぅになったら、それだけ地

「地域の水がめ」を住民らが守り続ける



球が汚染されたということ。この水を孫の世代まで引き継がない」と語る。水尾井戸と、本通りから南に延びる水尾町通りでは毎年七月、水祭りが開かれる。水を噴き出す水細工が並ぶ夏の風物詩である。(田儀慶樹)

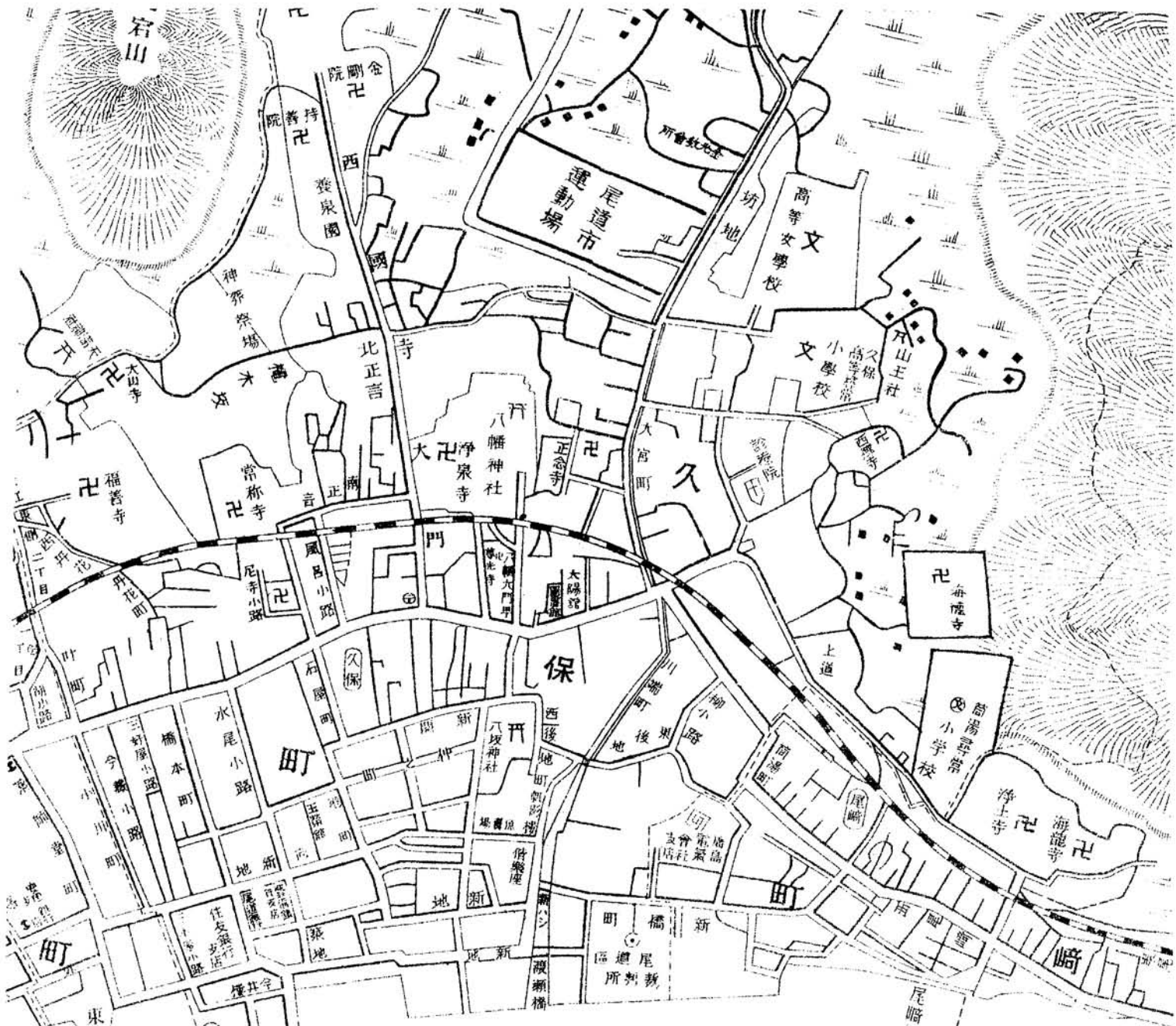


尾道市久保1丁目

水尾井戸

尾道市中 心部の本通り商店街の東側。通りに面した幅一・五段の路地を進むと、石畳の小さな広場に出る。その一角に水尾井戸はある。水深は約五段。江戸時代に掘られた豊かな水源を地元の水尾町町内会(十三世帯)が守り続ける。「お茶にしたら、水道水と比べてまろやかさがまるで違う」。青々とした水面をのぞき込み、茶・茶道具販売の今川吉弘さん(62)が自慢する。一九二五年、一帯に上水道が引かれるまでは住民が調理用や風呂水と

路地の潤い江戸期から



昭和三年四月發行 尾道市街地図

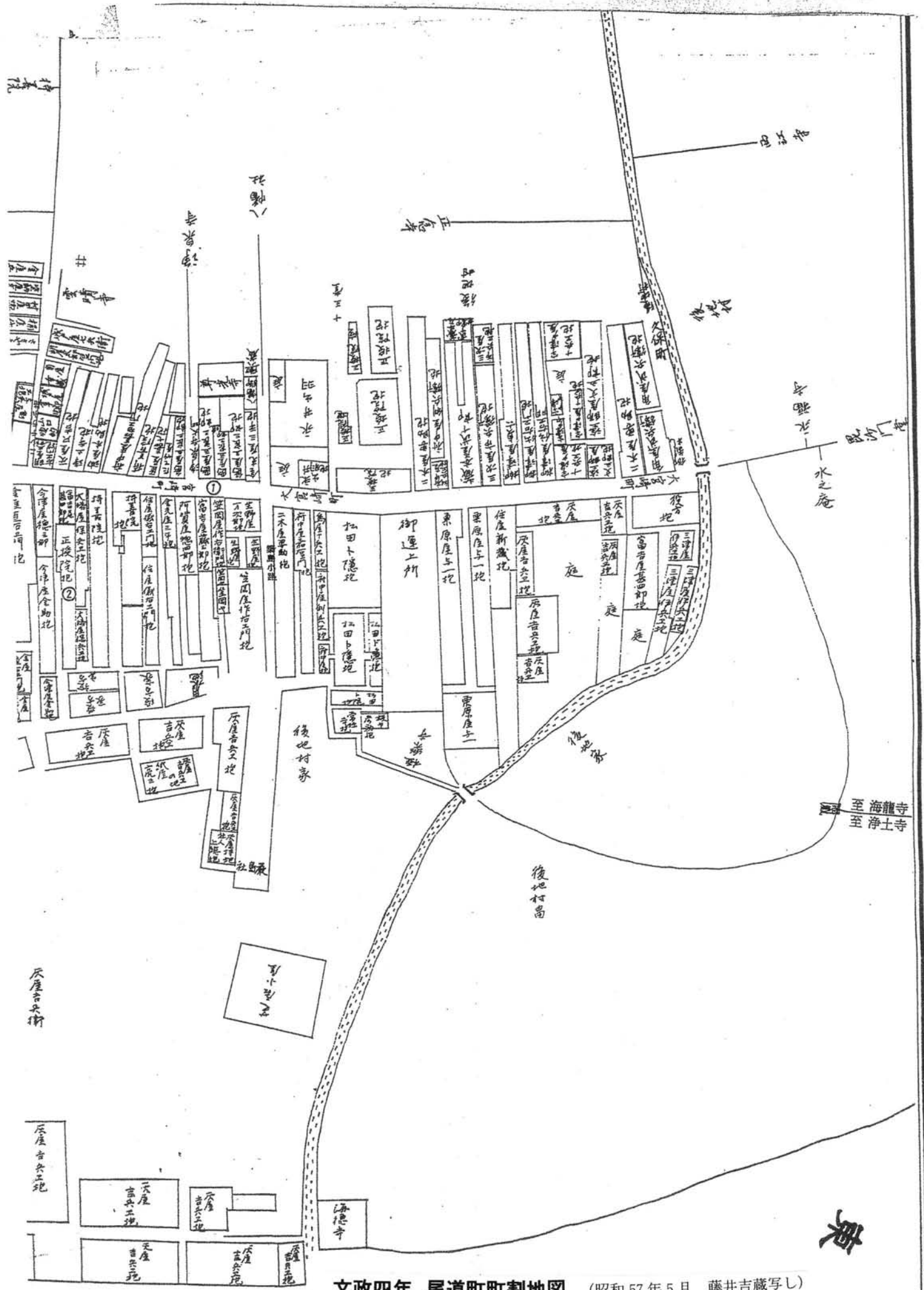
(小路の名前を見て確認して下さい)

- ・胡小路 ・叶町 (杓屋小路) ・小川町 (小川小路) ・今蔵小路
- ・三好屋小路 ・橋本町 (橋本小路) ・風呂小路
- ・丹花町 (丹花小路) ・水尾小路 ・尼寺小路

れんぎさか
「榎木坂」(通称レンガ坂) こども通ります。

昭和三年四月二十二日印刷
昭和三年四月二十九日發行
第貳版訂





文政四年 尾道町町割地図 (昭和57年5月 藤井吉蔵写し)



文政四年 尾道町町割地図 (昭和57年5月 藤井古蔵写し)

引用及び参考文献 「尾道市史 広島縣の神社 (広島県神社庁) 広島縣の標柱 (広島県神社庁) 尾道大学
 地域総合センター叢書4及び叢書5 尾道学研究会 20 回例会 (黄金通り長江の記憶フィールドワーク)
 考古学から見た地域文化 (広島県内における石造物研究の現状と課題 「溪水社」) 尾道遺跡発掘調査研究
 所出張展示より (尾道の石造物と石工) 文政四年尾道町町割地図 昭和三年発行尾道市街地図 郷
 土の石ふみ (第五集 山陽日日新聞社) 郷土の宮 (第二集 山陽日日新聞社) その他 (中国新聞の記事)

備陽史探訪の会

【事務局】

〒720-0824 広島県福山市多治米町5-19-8

TEL 084-953-6157

E-mail info@bingo-history.net

公式サイト

<http://bingo-history.net>